

『大智度論』所引の『中論』頌考

齋藤 明

はじめに

弘始三年（401年）十二月二十日、後秦の国王姚興ようこうに国師として迎えられた鳩摩羅什（350-409）は、首都の長安に入った。羅什は、その後、王により提供された訳場——前半は逍遙園、後半は大寺——に天下の逸材を集め、逝去する弘始十一年（409年）八月二十日までの八年間に、三十五部・二百九十四卷の経論を訳出したと伝えられる⁽¹⁾。後世、門下の僧肇（384-414）・道融（372-445?）等が開いたとされる四論学派の教理上の基礎をなした『中論』『百論』『十二門論』および『大智度論』は、いずれもこの時期、長安の逍遙園あるいは大寺において、羅什が中心となって翻訳された論書である。いま、これらの四論と、『大智度論』が注釈の対象とした『摩訶般若波羅蜜經』（以下、『大品般若經』と呼ぶ）の訳出完了年代および訳場を、当該経論の序文・跋文、ならびに『出三藏記集』『歴代三宝紀』『開元釈教録』等の目録にしたがって記せば、以下のとおりである。

弘始 六年（404年）四月二十三日：『大品般若經』四十卷・九十品，逍遙園。

同 六年（404年）：『百論』二卷，逍遙園（?）。

同 七年（405年）十二月二十七日：『大智度論』百卷，逍遙園。

同十一年（409年）：『中論』四卷，大寺。

同十一年（409年）：『十二門論』一卷，大寺。

ここに見るように、ナーガールジュナ作『中論』（**Madhyamaka-sāstra*）の偈頌——以下、『中論』頌とも呼ぶ——は、弘始十一年（409年）に、青目の注釈を伴う形で、その全体が初めて漢訳された⁽²⁾。『中論』の偈頌そのものは、しかし、すでに指摘されるように、『大智度論』や『十二門論』等⁽³⁾にも部分的に引用され、それぞれの論の中でかなり重要な役割りを果たしている。それゆえ『中論』の偈頌は、青目作『中論』の翻訳以前に、『大智度論』に引用される部分に限ってはすでに漢訳が果たされ、『大智度論』をとおして間接的に知られていたことになる。なお、「大智論記」⁽⁴⁾によれば、羅什は長安に入った翌年の弘始四年（402年）夏から、姚興のために『大智度論』の翻訳を開始したという。同論が注釈対象とした『大品般若経』には、すでに『光讚[般若]経』（竺法護 286年訳）および『放光般若経』（無羅叉 291年訳）という先行する両訳があったが、羅什はこれらに満足せず、『大智度論』を訳出する間の弘始五年四月二十三日に、並行して同経の新たな翻訳を開始し、一年の歳月をもってこれを完成している。

ところで、周知のように、『大智度論』には竜樹真作説から羅什著作説までの振幅をもつ著作問題がある⁽⁵⁾。また青目作『中論』は、諸注釈に引かれる『中論』頌の中では最初期の形態を伝えるものとして貴重である。さらにまた、部分的であるとはいえ、『大智度論』に引用される『中論』の偈頌は、ときに「中論の中に説くが如し（如中論中説）」（T vol. 25, 245c7-8）等と論名を伴って引用され、しかも現存する関連文献の中では、『中論』頌の最古の形態を伝承する点においても注目される。本稿では、『大智度論』所収偈の中でも、これらの問題、とくに『大智度論』の特色と著作問題に関して興味ある偈頌のいくつかを取りあげ、『プラサンナパダー』所引のサンスクリット文、青目作『中論』の所引偈、さらにまた必要に応じてチベット語訳あるいは漢訳に伝承

される他の諸注釈とも対照させながら、多少の考察を加えてみたい。

従来、『大智度論』所収の『中論』頌については、真野（1935-36）により部分的な言及がなされ、さらに、『大品般若経』の初品に対する注釈部分（第三十四卷まで）の詳細な訳注研究を果たした Lamotte（1944-1980）は、その脚注においてかなり詳しく言及あるいは論及する。そして、これらの先行研究を踏まえて、同論所収の『中論』頌の全体的な考察を行ったのが三枝（1966）である。

ところで、『大智度論』の引用する『中論』頌には、複数の偈頌を一偈に合成して意識したと考えられるものや、『中論』頌を下地にしながらかなりの程度改作したと目されるもの、あるいはまた単に『中論』頌からは着想を得たにすぎないと推測されるものも散見される。したがって、『中論』に関係する引用偈として広義に理解すれば、三枝（1966）が詳論するように三十を越える偈頌を数えることができる⁽⁶⁾。また、引用偈の形をとらずに、注釈文そのものの中にも、『中論』頌との関連をうかがわせるケースもある。それゆえ、『大智度論』とそこに引用あるいは援用される『中論』頌の関係の詳細については、今後、改めての考察が求められるであろう。

本稿は、『大智度論』に引かれる『中論』頌のテキストおよび解釈上の特色を考察することを直接の目的とする。このため、従来の研究を踏まえながらも、考察の方法に関しては幾分なりとも隔たりをもつ。まず第一に、上記の目的に沿って、本稿では一部に訳文の省略や意識の箇所が窺えるとしても、明らかに『中論』の特定の偈頌の引用であると判定されるケースに限定して考察を加えたい。次にまた、引用偈のテキストならびに解釈を考察するためには、当該の偈頌を引用する文脈を押さえることが求められよう。これは、偈頌のテキストとその解釈が偈頌訳にのみ見られる特異な現象であるのか、あるいはまた注釈部からも裏づけられるのかを吟味する必要があるからである。また第三には、偈頌のテキストならびに解釈上の特色を考察するうえでは、他の注釈との比較

考察も欠かせない。とくに青目作『中論』との対比は重要であるが、『大智度論』所引偈の特色を浮き彫りにするためには、現存するすべての注釈文献を視野に収めた議論が必須となるであろう。

一 所引の『中論』頌の全体的な特色

『大智度論』には、明らかに『中論』からの引用と考えられる偈頌は総計で十八を数えるが、その中の四偈は、異なる箇所二度にわたって引用されている。したがって、『中論』頌としては、総計で十四の偈頌が十八回引用されていることになる。なお、この中には、『中論』の帰敬偈として知られる「八不偈」も含まれるが、これは形式上二つの śloka によって構成されるため、内容的には一続きであるが、ここでは二偈として数える。

いま、引用される十八の『中論』頌の章ならびに偈頌番号と、引用される『大智度論』および青目作『中論』の該当箇所を対照させると、以下のとおりである。Aの通し番号は『大智度論』に引用される順、これに対してBのそれは『中論』頌の章・偈頌番号の順である。またCは、参考までに、それぞれの偈頌を引用する際の引用句を、A表の『大智度論』の引用箇所の前に置いたものである。

A 『大智度論』T vol.25	『中論』章・偈頌番号	青目作『中論』T vol.30
1. T 60b17-18 (巻一)	23.13 (PSP 460.5-6)	23.13 (T 31c10-11)
2. T 61b11-12 (同)	18.7 (PSP 364.3-4)	18.7 (T 24a3-4)
3. T 61b14-15 (同)	18.8 (PSP 369.14-15)	18.8 (T 24a5-6)
4. T 64b12-13 (同)	13.7 (PSP 245.11-12)	13.8 (T 18c7-8)
5. T 64c9-10 (同)	17.20 (PSP 322.9-10)	17.20 (T 22c21-22)
6. T 96c13-14 (巻五)	18.7 (PSP 364.3-4)	18.7 (T 24a3-4)

『大智度論』所引の『中論』頌考

7. T 97b12-13 (同)	1.1 (PSP 11.13-14)	1.1 (T 1b14-15)
8. T 97b13-14 (同)	1.2 (PSP 11.15-16)	1.2 (T 1b16-17)
9. T 104a7-8 (卷六)	7.34 (PSP 177.4-5)	7.35 (T 12a23-24)
10. T 107a11-12 (同)	24.18 (PSP 503.10-11)	24.18 (T 33b11-12)
11. T 107a12-13 (同)	15.11 (PSP 273.5-6)	15.11 (T 20b26-27)
12. T 117c29-118a1 (卷八)	17.20 (PSP 322.9-10)	17.20 (T 22c21-22)
13. T 198a6 (卷九)	25.19 (PSP 535.2-3)	25.19 (T 36a4-5)
14. T 198a7 (同)	25.20 (PSP 535.9-10)	25.20 (T 36a10-11)
15. T 245c9-10 (卷二五)	24.14 (PSP 500.3-4)	24.14 (T 33a22-23)
16. T 245c11-12 (同)	24.37 (PSP 513.4-5)	24.14 (T 34b18-19)
17. T 338c1-2 (卷三八)	18.8 (PSP 369.14-15)	18.8 (T 24a5-6)
18. T 338c3-4 (同)	25.20 (PSP 535.9-10)	25.20 (T 36a10-11)

B 『中論』章・偈頌番号 『大智度論』T vol. 25 青目作『中論』T vol. 30

(1). 1.1 (PSP 11.13-14)	T 97b12-13 (卷一)	1.1 (T 1b14-15)
(2). 1.2 (PSP 11.15-16)	T 97b13-14 (同)	1.2 (T 1b16-17)
(3). 7.34 (PSP 177.4-5)	T 104a7-8 (卷六)	7.35 (T 12a23-24)
(4). 13.7 (PSP 245.11-12)	T 64b12-13 (卷一)	13.8 (T 18c7-8)
(5). 15.11 (PSP 273.5-6)	T 107a12-13 (卷六)	15.11 (T 20b26-27)
(6). 17.20 (PSP 322.9-10)	T 64c9-10 (卷一)	17.20 (T 22c21-22)
(7). 17.20 (PSP 322.9-10)	T 117c29-118a1 (卷八)	17.20 (T 22c21-22)
(8). 18.7 (PSP 364.3-4)	T 61b11-12 (卷一)	18.7 (T 24a3-4)
(9). 18.7 (PSP 364.3-4)	T 96c13-14 (卷五)	18.7 (T 24a3-4)
(10). 18.8 (PSP 369.14-15)	T 61b14-15 (卷一)	18.8 (T 24a5-6)
(11). 18.8 (PSP 369.14-15)	T 338c1-2 (卷三八)	18.8 (T 24a5-6)
(12). 23.13 (PSP 460.5-6)	T 60b17-18 (卷一)	23.13 (T 31c10-11)

(13). 24.14 (PSP 500.3-4)	T 245c9-10 (卷二五)	24.14 (T 33a22-23)
(14). 24.18 (PSP 503.10-11)	T 107a11-12 (卷六)	24.18 (T 33b11-12)
(15). 24.37 (PSP 513.4-5)	T 245c11-12 (卷二五)	24.37 (T 34b18-19)
(16). 25.19 (PSP 535.2-3)	T 198a6 (卷一九)	25.19 (T 36a4-5)
(17). 25.20 (PSP 535.9-10)	T 198a7 (同)	25.20 (T 36a10-11)
(18). 25.20 (PSP 535.9-10)	T 338c3-4 (卷三八)	25.20 (T 36a10-11)

C 各引用の導入句

導入句	『大智度論』 T vol. 25
1. 「如説偈言」	T 60b17-18 (卷一)
2. 「如摩訶衍義偈中説」	[T 61b11-12 (同) T 61b14-15 (同)
3.	
4. 「如中論中偈説」	T 64b12-13 (同)
5. 「如偈説*」	T 64c9-10 (同) *T: 「説偈」; 宋元明三本, 宮内 庁本, 石山寺本: 「偈説」。
6. 「如偈説」	T 96c13-14 (卷五)
7. 「如説諸法相偈」	[T 97b12-13 (同) T 97b13-14 (同)
8.	
9. 「如偈説」	T 104a7-8 (卷六)
10. 「如偈説」	[T 107a11-12 (同) T 107a12-13 (同)
11.	
12. 「如説偈言」	T 117c29-118a1 (卷八)
13. 「中論中亦説」	[T 198a6 (卷一九) T 198a7 (同)
14.	
15. 「如中論中説」	[T 245c9-10 (卷二五) T 245c11-12 (同)
16.	

- | | | |
|------------|---|-----------------|
| 17. 「中論中説」 | { | T 338c1-2 (卷三八) |
| 18. | | T 338c3-4 (同) |

以上のリストから、『大智度論』に引用される『中論』頌について、いくつかの全体的な傾向をうかがうことができる。まず、A表からは、『中論』頌の引用は、完訳したといわれる第三十四卷までにはほぼ集中していることが分かる。十八偈の中の十六偈までが初品に引用され、残る二偈は第四「往生品」上（第三十八卷）に引かれる。なお、三枝（1966）が指摘するように、この傾向は『中論』頌にとどまらず、むしろ『大智度論』の引用偈——同氏によれば二百十九回・六百十二偈——の全体的な傾向である。第三十五卷以降第百卷まで、つまり第二「報応（奉鉢）」品から第九十「囑累」品までに引用される偈頌は、上記の『中論』の二偈を含む総計三偈にすぎないのである。この点は、「大智論記」に、

「[大智度]論の初品は三十四卷で、[大品般若経の第]一品を解釈する。これはその原本を完全に論じている。[これに対して]第二品以下は、[羅什]法師が、こ[の原本]を省略してその要点を取り出すことでよしとし、文章の趣意を解説しているにすぎない。

（論初品三十四卷。解釈一品。是全論其本。二品已下。法師略之取其要。

足以開釈文意而已。）⁽⁷⁾

とあるように、第二品以下が要略本であることに深く関係するものと考えられる。竜樹撰と呼ばれる大品系、つまり二万五千頌系の般若経典に対する注釈書が完本としてあり、それを羅什が底本としていたとすれば、その写本そのものに引用偈頌に関するこのような偏りがあるとはまず考えられない。その場合には、羅什が引用偈頌部分を意図して省いたと想定するのが自然であろう。また『大智度論』が羅什の著作、あるいはまた『大品般若経』を翻訳し講じた際の、一種の講義録を整理したものであるなら、第二品以下は、引用を極力抑えて単

に同経の「文章の趣意を解説し（開釈文意）」たものということになる。

次にまた、B表にうかがえるのは、引用される『中論』頌が、かなり重要な章の著名な詩頌が多いことである。ちなみに、青目が「声聞法にて第一義の道に入ることを説く」⁽⁸⁾と位置づける第二十六章および第二十七章からの引用は見られない。冒頭章からは「八不」偈、第七章からは、生・住・滅という有為法の三相を幻や夢や蜃気楼のごとしと喩える最終第三十四偈、第十三章からは、不空なものがないから空なるものもないと語る第七偈、断と常の二見の特質を語る第十五章の最終第十一偈、行為（業）の不失の法を語る第十七章・第二十偈、法性が不生・不滅の性質であることを語る第十八章・第七偈、仏陀は文脈に依じて、すべては真実である、真実でない、真実と非真実の両者である、両者のいずれでもないと説くという同章・第八偈、空においては顛倒もないと語る第二十三章・第十三偈、空性が妥当する者にとってのみすべてが妥当するという第二十四章・第十四偈、「三諦偈」として知られる同章・第十八偈、空を破壊する者にとってはすべての行為が不可能になると語る同章・第三十七偈、そして第二十五章からは、輪廻（「世間」）と涅槃との間にはいささかの相違もないという第十九偈および第二十偈を引用する。

さらにC表からは、『中論』頌が、単なる「偈」として引用される以外に、「摩訶衍義偈」や「説諸法相偈」、さらにはまた『中論』という論書名に言及した導入句も四例あることが分かる。『高僧伝』羅什伝によれば⁽⁹⁾、羅什は罽賓（Kashmir）からの帰路、西暦361年に沙勒（疏勒 Kashgar）の地で須利耶蘇摩（*Sūryasoma）から大乘を学ぶ機会を得て、『中論』、『百論』および『十二門論』を受誦したという。この記述が正しければ、『中論』（**Madhyamaka śāstra*）の呼称は4世紀半ばには定着していたことがうかがえる。

二 『大智度論』所引の『中論』頌一覧

さて、本稿の主題である『大智度論』所引の『中論』頌を考察するに際して、ここではまず、当該の十八偈をB表の順に沿って対照してみたい。以下の表において、[MK]は唯一サンスクリットで伝承される『プラサンナパダー』所引偈をさす。その後、参考までに和訳とニマタク (Nyi ma grags, 1055-?)による『プラサンナパダー』所引偈のチベット語訳 ([Tib])を添える。[大] [中]は、それぞれ『大智度論』と『中論』頌をさす。また、[大 A5] [大 A12]等とあるのは、『大智度論』の中で、『中論』頌が重複して引用されるばあい、A表の番号を付して区別したものである。

(1), (2) : MK 1.1-2

- [MK] (1) anirodham anutpannam anucchedam aśāsvatam/
 anekārtham anānārtham anāgamam anirgamam//
 (2) yaḥ pratīyasamutpādaṃ prapañcopaśamaṃ śivam/
 deśayāmāsa saṃbuddhas taṃ vande vadatāṃ varam// (MK
 1.1, 2; PSP 11.13-14)

「不滅，不生，不斷，不常，不一，不異，不來，不去であり，戲論が寂滅し，吉祥である縁起を覚者は説かれた。私はその方を説法者の中の最もすぐれた方として敬意を表する。」

- [Tib] (1) gang gis rten cing 'brel par 'byung// 'gag pa med pa skye
 med pa// chad pa med pa rtag med pa// 'ong ba med pa
 'gro med pa//
 (2) tha dad don min don gcig min// spros pa nyer zhi zhi
 bstan pa// rdzogs pa'i sangs rgyas smra rnams kyi// dam

pa de la phyag 'tshal lo// (PSP D 'A 4b6-7; P 'A 5a7-8)

[大] (1) 不生不滅 不斷不常 不一不異 不去不來

(2) 因緣生法 滅諸戲論 佛能說是 我今當禮 (T 97b12-14)

[中] (1) 不生亦不滅 不常亦不斷 不一亦不異 不來亦不出

(2) 能說是因緣 善滅諸戲論 我稽首禮佛 諸說中第一 (T 1b14-17)

(3) : MK 7.34 (青目作『中論』では7.35)

[MK] yathā māyā yathā svapno gandharvanagaram yathā/
tathotpādas tathā sthānam tathā bhaṅga udāhṛtam// (PSP
177.4-5)

「あたかも幻のごとく、夢のごとく、ガンダルヴァ城(蜃気楼)のごとくであると、そのように生と住と滅は喩説された。」

[Tib] rmi lam ji bzhin sgyu ma bzhin// dri za'i grong khyer ji
bzhin du// de bzhin skye (D:bskyed) dang de bzhin gnas// de
bzhin du ni 'jig pa gsungs// (PSP D 60a5-6; P 69a4-5)

[大] 如夢如幻 如提闍婆 一切諸法 亦復如是 (T 104a7-8)

[中] 如幻亦如夢 如乾闥婆城 所説生住滅 其相亦如是 (T 12a23-24)

(4) : MK 13.7 (青目作『中論』では13.8)

[MK] yady aśūnyam bhavet kiṃcit syāc chūnyam api⁽¹⁰⁾ kiṃcana/
na kiṃcid asty aśūnyam ca kutaḥ śūnyam bhaviṣyati// (PSP
245.11-12)

「もしも何らかの不空なるものがあるならば、何らかの空なるものもあるであろう。しかしながら、[実際には] 不空なるいかなるものもない。[それゆえ] どこに空なるものがあるであろうか。」

[Tib] gal te stong min cung zad yod// stong pa'ang cung zad yod
par 'gyur// mi stong cung zad yod min na// stong pa'ang yod
par ga la 'gyur// (PSP D 83a3-4; P 94b8)

[大] 若有所不空 應當有所空 不空尚不得 何況得於空 (T 64b12-13)

[中] 若行不空法 即應有空法 實無不空法 何得有空法 (T 18c7-8)

(5): MK 15.11

[MK] asti yad dhi svabhāvena na tan nāstīti śāśvatam/
nāstidānim abhūt pūrvam ity ucchedaḥ prasajyate// (PSP 272.
5-6)

「自性をもって存在しているものは非存在ではない、といつては常住
[の见解] が [付随し]、以前には存在していたが、今は存在していな
い、といつては断滅 [の见解] が付随する。」

[Tib] gang zhig rang bzhin gyis yod pa// de ni med pa min pas
rtag// sngon byung da ltar med ces pa// des na chad par thal
bar 'gyur// (PSP D 92b2; P 105b6)

[大] 若法實有 不應還無 今無先有 是名爲斷 (T 107a12-13)

[中] 若法有定性 非無則是常 先有而今無 是則爲断滅 (T 20b26-27)

(6), (7): MK 17.20

[MK] śūnyatā ca na cocchedaḥ saṃsāraś ca na śāśvatam/
karmaṇo 'vipraṇāśaś ca dharmo buddhena deśitaḥ// (PSP 322.
9-10)

「空性であつて断滅ではなく、また輪廻であつて常住ではない。ブツ
ダは、行為(業)の不失の法を説かれたのである。」

[Tib] stong pa nyid dang chad med dang// 'khor ba dang ni rtag

pa min// las rnams chud mi za ba'i chos// sangs rgyas kyis ni
bstan pa yin// (PSP D 106b5-6; P 122a7-8)

[大 A5] (6) 雖空亦不斷 相續亦不常 罪福亦不失 如是法佛說 (T
64c9-10)

[大 A12] (7) 佛法相雖空 亦復不斷滅 雖生亦非常 諸行業不失 (T
117c29-118a1)

[中] 雖空亦不斷 雖有亦不常 業果報不失 是名佛所說 (T
22c21-22)

(8), (9) : MK 18.7

[MK] nivṛttam abhidhātavyaṃ nivṛttaś cittagocaraḥ⁽¹¹⁾/

anutpannāniruddhā hi nirvāṇam iva dharmatā// (PSP 364.3-4)

「心の活動対象が止滅する [ことにより], 言語表現されるべき対象
は止滅する。[心の活動対象は法性を認識することによって止滅する]。
法性は実に、涅槃のごとく不生・不滅である。」

[Tib] brjod par bya ba bzlog pa ste// sems kyi spyod yul bzlog pas
so// ma skyes pa dang ma 'gags pa// chos nyid mya ngan
'das dang mtshungs// (PSP D 116b6; P 133b6-7)

[大 A2] (8) 語言盡竟 心行亦訖 不生不滅 法如涅槃 (T 61b11-12)

[大 A6] (9) 言語已息 心行亦滅 不生不滅 如涅槃相 (T 96c13-14)

[中] 諸法實相者 心行言語斷 無生亦無滅 寂滅如涅槃 (T 24a3
-4)

(10), (11) : MK 18.8

[MK] sarvaṃ tathyaṃ na vā tathyaṃ tathyaṃ cātathyaṃ eva ca/
naivātathyaṃ naiva tathyaṃ etad buddhānuśāsanam// (PSP

369.14-15)

「すべては真実である。あるいは真実でない。[あるいはまた], 真実であって真実でない。[あるいは], 真実でないのでもなく真実なのでもない。これがブツダの教説である。」

[Tib] thams cad yang dag yang dag min// yang dag yang dag ma
yin nyid// yang dag min min yang dag min// de ni sangs
rgyas rjes bstan pa'o// (PSP D 118b2-3; P 135b5-6)

[大 A3] (10) 一切實一切非實 及一切實亦非實 一切非實非不實 是名諸
法之實相 (T 61b14-15)

[大 A17](11) 一切諸法實 一切法虛妄 諸法實亦虛 非實亦非虛 (T
338c1-2)

[中] 一切實非實 亦實亦非實 非實非非實 是名諸佛法 (T
24a5-6)

(12) : MK 23.13

[MK] anitye nityam ity evaṃ yadi grāho viparyayaḥ/
nānityaṃ vidyate śūnye kuto grāho viparyayaḥ// (PSP 460.5
-6)

「もしも「無常であるものを恒常である」とこのように捉えることが
顛倒であるなら、空であるものには無常であることが [そもそも] な
い [のであるから], どうして顛倒した把握があるであろうか。」

[Tib] gal te mi rtag rtag pa zhes// de ltar 'dzin pa log yin na//
stong la mi rtag yod min pas// 'dzin pa ji ltar log pa yin//
(PSP D 151a3; P 171b3-4)

[大] 無常見有常 是名爲顛倒 空中無無常 何處見有常 (T 60b17-18)

[中] 於無常著常 是則名顛倒 空中無有常 何處有常倒 (T 31c10-11)

(13) : MK 24.14

[MK] sarvaṃ ca yujyate tasya śūnyatā yasya yujyate/
sarvaṃ na yujyate tasya śūnyaṃ yasya na yujyate// (PSP 500.
3-4)

「空性が妥当する者にとっては、すべてが妥当する。空が妥当しない者にとっては、すべてが妥当しない。」

[Tib] gang la stong pa nyid rung ba// de la thams cad rung bar
'gyur// gang la stong nyid mi rung ba // de la thams cad mi
rung 'gyur// (PSP D 166a3; P 188a7)

[大] 若信諸法空 是則順於理 若不信法空 一切皆違失 (T 245c9-10)

[中] 以有空義故 一切法得成 若無空義者 一切則不成 (T 33a22-23)

(14) : MK 24.18

[MK] yaḥ pratīyasamutpādaḥ śūnyatām tāṃ pracakṣmahe/
sā prajñaptir upādāya pratīpat saiva madhyamā// (PSP 503.10
-11)

縁起をわれわれは空性と呼ぶ。それは [質料因を] 取っての仮名であり、それは中道に他ならない。」

[Tib] rten cing 'brel par (D:bar) 'byung ba gang// de ni stong pa
nyid du bshad// de ni brten nas gdags pa ste// de nyid dbu
ma'i lam yin no// (PSP D 167a5-6; P 189b3-4)

[大] 因縁生法 是名空相 亦名假名 亦名中道 (T 107a11-12)

[中] 衆因縁生法 我說即是無 亦爲是假名 亦是中道義 (T 33b11-12)

(15) : MK 24.37

[MK] na kartavyaṃ bhavet kiṃcid anārabdhā bhavet kriyā/

kāraḥ syād akurvāṇaḥ śūnyatām pratibādhatāḥ// (PSP 513.4-5)

「空性を破壊する者にとっては、なされうること何もなく、行為は起こされることがなくなり、行わない者が行為者となるであろう。」

[Tib] stong pa nyid la gnod byed na// bya ba ci yang med 'gyur zhing// rtsom pa med pa'i bya bar 'gyur// mi byed pa yang byed por (D:par) 'gyur// (PSP D 170b5-6; P 193a7-8)

[大] 若以無是空 無所應造作 未作已有業 不作有作者 (T 245c11-12)

[中] 若破於空義 卽應無所作 無作而有作 不作名作者 (T 34b18-19)

(16) : MK 25.19

[MK] na saṃsārasya nirvāṇāt kiṃcid asti viśeṣaṇam/

na nirvāṇasya saṃsārāt kiṃcid asti viśeṣaṇam// (PSP 535.2-3)

「輪廻は涅槃といかなる相違もない。涅槃は輪廻といかなる相違もない。」

[Tib] 'khor ba mya ngan 'das pa las// khyad par cung zad yod ma yin// mya ngan 'das pa'ang (P:pa 'ang) 'khor ba las// khyad par cung zad yod ma yin// (PSP D 179b7; P 203a7)

[大] 涅槃不異世間 世間不異涅槃 (T 198a6)

[中] 涅槃與世間 無有少分別 世間與涅槃 亦無少分別 (T 36a4-5)

(17), (18) : MK 25.20

[MK] nirvāṇasya ca yā koṭiḥ koṭiḥ saṃsaraṇasya ca/

na tayor antaraṃ kiṃcit susūksmam api vidyate// (PSP 535.9-10)

「涅槃の究極と涅槃の究極、それら両者にはいかなる微細な差異もな

い。」

[Tib] mya ngan 'das mtha' (D:myang 'das mtha' dag) gang yin
pa// de ni 'khor ba'i mtha' yin te//⁽¹²⁾ de gnyis khyad par
cung zad ni// shin tu phra ba'ang (P ba 'ang) yod ma yin//
(PSP D 180a3; P 203b2-3)

[大A14] (17) 涅槃際世間際 一際無有異故 (T 198a7)

[大A18] (18) 涅槃際爲眞 世間際亦眞 涅槃世無別 小異不可得 (T
338c3-4)

[中] 涅槃之實際 及與世間際 如是二際者 無毫釐差別 (T
36a10-11)

以上が引用される『中論』頌の総計十八の詩頌である。これらの偈頌をふくめ、『中論』頌のサンスクリットテキストはすべて śloka (=anuṣṭubh) を韻律として構成されている。この点を踏まえて、同じ羅什訳である青目作『中論』所引偈や『十二門論』と比較するとき、『大智度論』所引偈が何よりも特異なのは、翻訳の形式がかなり不統一であるという事実である。前者がいずれも「五言古詩」の形式、つまり五言（五字）×四句の形で各詩頌を統一的に翻訳するにも関わらず、『大智度論』では、以上に見るかぎりでも、四言四句（(1) (2) (3) (5) (8) (9) (14)）、五言四句（(4) (6) (7) (11) (12) (13) (15) (18)）、七言四句（(10)）に加えて、六言二句（(16) (17)）までが登場する⁽¹³⁾。ただし、(16) と (17) は『中論』第二十五章の第十九偈および第二十偈として内容的にも、また引用箇所においても連続しており、訳者は一偈と見なして六言四句で漢訳した可能性が強い。そうであるなら、少なくとも『中論』頌に関しては、四句である点で共通するものの、各句が四言から七言までの幅をもって構成されていることになる。いずれも唐代以前に成立した古体詩に例を見るが、同一の論書の中で、しかも原本が同一形式の韻律によって構成されてい

るにも関わらず、翻訳された詩形にこれほどの幅が見られる例は珍しい。

これに加えて見逃さないのは、引用箇所本文脈が相違するとはいえ、四例ある同一偈頌の訳文がいずれも異なる点である。以下はMK 17.20, 18.7, 18.8, 25.20の四偈に対する、『大智度論』における二種類の訳、ならびに青目作『中論』の訳文のみを抽出した一覧である。

MK 17.20 :

[大 A5] (6) 雖空亦不斷 如續亦不常 罪福亦不失 如是法佛說 (T 64c9-10)

[大 A12] (7) 佛法相雖空 亦復不斷滅 雖生亦非常 諸行業不失 (T 117c29-118a1)

[中] 雖空亦不斷 雖有亦不常 業果報不失 是名佛所說 (T 22c21-22)

MK 18.7 :

[大 A2] (8) 語言盡竟 心行亦訖 不生不滅 法如涅槃 (T 61b11-12)

[大 A6] (9) 言語已息 心行亦滅 不生不滅 如涅槃相 (T 96c13-14)

[中] 諸法實相者 心行言語斷 無生亦無滅 寂滅如涅槃 (T 24a3-4)

MK 18.8 :

[大 A3] (10) 一切實一切非實 及一切實亦非實 一切非實非不實 是名諸法之實相 (T 61b14-15)

[大 A17] (11) 一切諸法實 一切法虛妄 諸法實亦虛 非實亦非虛 (T 338c1-2)

[中] 一切實非實 亦實亦非實 非實非非實 是名諸佛法 (T 24a5-6)

MK 25.20 :

[大 A14] (17) 涅槃際世間際 一際無有異故 (T 198a7)

[大 A18] (18) 涅槃際爲眞 世間際亦眞 涅槃世無別 小異不可得 (T 338c3-4)

[中] 涅槃之實際 及與世間際 如是二際者 無毫釐差別 (T 36a10-11)

これらの例は、『大智度論』所引の『中論』頌の特色をかなり典型的な形で物語っている。まず第一に、『大智度論』所引偈は、部分的に意識を交える例も多いが、サンスクリット本に照らして、翻訳の厳密度という点では、全体として青目作『中論』にやや劣ることは否めない。次にまた、『大智度論』という作品が純然たる翻訳文献であれ、あるいはまた多分に羅什自身による著作の性格が強かったにせよ、同論に引用される『中論』頌の文章は、複数の人間が関与して作成されたと考えざるを得ない。少なくとも引用された『中論』頌に関するかぎり、羅什あるいはその特定の弟子が最終的に訳文を統一的に整理した跡は窺えないのである。

三 引用偈の個別的考察——その1 : MK 23.13——

さて次に、サンスクリット本、あるいは『中論』の他の諸注釈の解釈に照らして興味深い訳文をもつ二つの例をここで検討してみたい。

第一の例は、『中論』第二十三章・第十三偈の引用である。前章に挙げたように、同偈の『プラサンナパダー』所引のサンスクリット本、その和訳、ニマタクによる同チベット語訳、『大智度論』所引偈、青目作『中論』所引偈の漢訳は以下のとおりである。

[MK] anitye nityam ity evaṃ yadi grāho viparyayaḥ/

nānityaṃ vidyate śūnye kuto grāho viparyayaḥ// (PSP 460.5-6)

「もしも「無常であるものを恒常である」とこのように捉えることが顛倒であるなら、空であるものには無常であることが[そもそも]ない[のであるから]、どうして顛倒した把握があるであろうか。」

[Tib] gal te mi rtag rtag pa zhes// de ltar 'dzin pa log yin na//
stong la mi rtag yod min pas// 'dzin pa ji ltar log pa yin//
(PSP D 151a3; P 171b3-4)

[大] 無常見有常 是名爲顛倒 空中無無常 何處見有常 (T 60b17-18)
(無常を有常と見る、これを名づけて顛倒となさば、空の中には無常無し。何れの處にか有常を見ん。)

[中] 於無常著常 是則名顛倒 空中無有常 何處有常倒 (T 31c10-11)
(無常に於いて常と著する。是れ則ち顛倒と名づけば、空の中に常有ること無し。何れの處にか常の[顛]倒有らん。)

この偈については、まず『無畏論』『仏護注』『般若灯論』と『プラサンナバダー』との間にテキストならびに解釈上の相違が見られる。後者の著者であるチャンドラキールティ (Candrakīrti, 600-650 頃) によれば、空においては無常であることがそもそもないのであるから、無常を常と捉えることと規定された顛倒はあり得ないという。ニマタクのチベット語訳もこのテキストならびにチャンドラキールティの解釈を反映した内容となっている⁽¹⁴⁾。

これに対して、前者のチベット語訳 (ルイギェルツェン Klu'i rgyal mtshan, 9C 初頭訳) は⁽¹⁵⁾、三者いずれも、

gal te mi rtag rtag pa zhes// de ltar 'dzin pa log yin na//
stong la rtag pa yod min pas// 'dzin pa ji ltar log ma yin//
(ABh D Tsa 86b6, P Tsa 100a6-7; BP D Tsa 268a7, P Tsa 303a8; PP D Tsha 223a1-2, P Tsha 279b8-280a1)

「もしも「無常であるものを恒常である」とこのように捉えることが顛倒であるなら、空であるものには恒常であることが[そもそも]ない[のであるから]、[恒常であると]捉えることが、どうして顛倒でないであろうか。」

とあり、後半の下線部が相違する。『無畏論』『仏護注』『般若灯論』の三者は、いずれもルイギェルツェン訳が的確に伝えるような解釈に立つ。つまり、空の立場からみても、恒常であることはあり得ないのであるから、恒常であると捉えることは顛倒に他ならないという解釈である。したがって、訳文と注釈内容の両面から推して、三者が伝える後半偈のテキストは、『プラサンナパダー』所引のそれとは部分的に異なり、na nityam vidyate śūnye kuto grāho viparyayaḥ// とあったものと考えられる。

さて、当該の偈頌に関するこのような問題の一端を念頭に置きながら、ここで次に、『大智度論』と『中論』のテキストならびに解釈を検討したい⁽¹⁶⁾。

『大智度論』が引用する当該の偈頌は、「無常見有常 是名爲顛倒 空中無無常 何處見有常（無常を有常と見る、これを名づけて顛倒となさば、空の中には無常無し。何れの處にか有常を見ん）」とあり、その原本は先の『プラサンナパダー』所引のサンスクリットテキストに等しく、nānityam vidyate śūnye kuto grāho viparyayaḥ// を想定させる。なお、第四句の「何處見有常」は kuto grāho viparyayaḥ// の意識と考えられ、テキストの相違を推測するには及ばないであろう。ちなみに、安慧の『大乘中観釈論』に引かれる当該偈も、「若無常謂常 此執顛倒者 空中無無常 何有顛倒執」⁽¹⁷⁾とあり、依拠したと推定されるテキストと解釈は『大智度論』および『プラサンナパダー』のそれに等しいと考えられる。

これに対して、同じ羅什訳とされる青目作『中論』に引かれる同偈は、「於無常著常 是則名顛倒 空中無有常 何處有常倒（無常に於いて常と著する、是れ則ち顛倒と名づけば、空の中に常有ること無し。何れの處にか常の[顛]

倒行らん)」とある。後半偈の原本は、na nityaṃ vidyate śūnye kuto grāho viparyayaḥ// を想定させ、下線部は先の『無畏論』等の所引偈のケースと同じである。ただし、第四句の「何處有常倒」に関しては、「常」の字を補ってはいらぬものの、原本として推定されるテキストは『プラサンナパダー』および『大智度論』所引偈に等しい。したがって、これは第三のテキストおよび解釈ということになる。

このように、後半偈のテキスト（[PSP] 以外は推定形）に限定していれば、諸注釈に引用される『中論』頌には、

① [大] [安慧釈] [PSP] :

nānityaṃ vidyate śūnye kuto grāho viparyayaḥ//

② [ABh] [BP] [PP] :

na nityaṃ vidyate śūnye kuto grāho 'viparyayaḥ//

③ [中] : na nityaṃ vidyate śūnye kuto grāho viparyayaḥ//

という二種類の相違がある⁽¹⁸⁾。発音上は、短母音の a か長母音の ā か、そしてまたアヴェグラハ（'）のあるなしという程度の差異であり、伝承上の聞き違いや誤写も十分にあり得よう。ただし、これによって偈頌内容の理解という点では、かなり大きな相違が生まれることになる。

偈頌内容の観点からいえば、空においてはそもそも顛倒の対象となる無常性がないのであるから、「無常であるものを恒常と捉えること」と規定された顛倒はあり得ないとする①の [大] [安慧釈] [PSP] か、あるいは、空において恒常性はないのであるから、恒常であると捉えることは紛れもなく顛倒である、と解説する②の [ABh] [BP] [PP] の理解が適当であるように思われる。前者は、顛倒の対象となる無常性があり得ないこと論拠とし、また後者は、空においては恒常も無常もないから、無常であるものを恒常であると捉えることばかりでなく、無常であるものを無常であると捉えることも顛倒であることになるということを論拠として、結果として、両者いずれも「無常であるものを恒

常であると捉えること」と伝統的に規定された「顛倒」観を否定するのである。この点で、③の青目作『中論』のテキストおよび解釈は、同注釈内の続く第十四偈に照らしても⁽¹⁹⁾、やや理解に苦しむところである。

『大智度論』と青目作『中論』の引用偈には、以上のようなテキストならびに解釈に関する相違がある。しかも同偈は、引用されるそれぞれの文脈に照らしても、偈頌部分のみの偶然の相違というのでなく、それぞれ自覚的に選び取られものと考えられ、加えられた注釈内容もそれぞれの偈頌に相応しいものとなっているのである。

『大智度論』の引用は、卷一・初品序「縁起義」釈論の中の四悉檀を解説する箇所に次のように出る。

「復次著常顛倒衆生。不知諸法相似相續。有如是人觀無常是對治悉檀。非第一義。何以故。一切諸法自性空故。如說偈言。

無常見有常 是名爲顛倒 空中無無常 何處見有常

問曰。一切有爲法皆無常相。應是第一義。……答曰。……以是故。

諸法無常非第一義。」(T vol. 25, 60b13-28)

(復た次に、常の顛倒に著する衆生は、諸法の相似相續を知らず。是の如き人の無常を觀すること有るは是れ對治悉檀にして第一義に非ず。何を以ての故に。一切諸法の自性空なるが故なり。偈を説いて言うが如し。

無常を有常と見る、これを名づけて顛倒となさば、空の中には無常無し。何れの處にか有常を見ん。

問うて曰く。一切の有爲法皆無常の相なるは、応に是れ第一義なるべし。……答えて曰く。……是れを以ての故に、諸法の無常は第一義に非ず。)これに対して、青目作『中論』では、以下のような文脈のもとに引用される。

「問曰。經說常等四顛倒。……何故言都無。答曰。

於無常著常 是則名顛倒 空中無有常 何處有常倒

若於無常中著常。名爲顛倒。諸法性空中無有常。是中何處有常顛倒。餘

三亦如是。」(T vol. 25, 31c5-13)

(問うて曰く。経に常等の四顛倒を説く。……。何故に都^すべて無しと言うや。答えて曰く。

無常に於いて常と著する。是れ則ち顛倒と名づけば、空の中に常有ること無し。何れの處にか常の〔顛〕倒有らん。

若し無常の中に於いて常と著するを名づけて顛倒と為さば、諸法の性空の中に常有ること無し。是の中、何れの處にか常の顛倒有らん。余の三も亦是の如し。)

このように、先にみた両論それぞれのテキストは、いずれも両論の文脈に符合しているのである。以上のテキストおよび解釈からは、少なくとも次の二点を窺い知ることができる。まず第一に、『大智度論』所引偈に関しても、青目作『中論』のばあいと同様に、依拠したサンスクリットテキストは、たとえそれが写本の形であれ、あるいは羅什によって暗誦された形であったにせよ、存在していたものと考えられる。

では、一体なぜ、『中論』の同じ偈頌で、しかも同じ羅什の手になる翻訳であるにも関わらず、そのテキストと解釈が異なるのであろうか。これが第二のポイントである。たしかに羅什自身が文脈に応じて、部分的ながらも意識してテキストを改めた、という可能性もないとはいえない。『大智度論』が基本的に羅什の著作あるいは講義録の類であって、暗誦している引用偈のテキストを漢訳しながら織り込んだというのが実態であれば、このような、いわば羅什確信犯説も成り立つやも知れない。

ただし、今のばあい、その著者は誰であれ、四世紀半ばには西域に伝承されていた何らかの原本が羅什の前にあったと考えるのが素直な解釈であるように思われる。すなわち、その原本の文脈においては、「一切有爲法皆無常」説は対治悉檀であり、第一義悉檀においては「一切諸法自性空」であると説かれており、それゆえそこでは、*nānityaṃ vidyate śūnye kuto grāho*

viparyayaḥ// (空中無無常 何處見有常) という後半偈をもつ同偈がすでに引用されていたと見る解釈である。このような、いわば原本起因説に立つなら、両本における上記のようなテキストならびに解釈上の相違は、原本レベルでの相違を反映したものであって、羅什はそれぞれをかなり忠実に翻訳したといえることができる。

四 引用偈の個別的考察——その2: MK 17.20——

さて、最後は『中論』第十七章・第二十偈の引用である⁽²⁰⁾。『大智度論』の中では、先に見たように二箇所引用があるが、訳文は少なからず異なる。先に挙げた対照表から当該偈を抜粋すれば、以下のとおりである。

[MK] śūnyatā ca na cocchedaḥ saṃsāraś ca na śāśvatam/

karmaṇo 'vipraṇāśaś ca dharmo buddhena deśitaḥ// (PSP 322.9-10)

「空性であって断滅ではなく、また輪廻であって常住ではない。ブツダは、行為(業)の不失の法を説かれたのである。」

[Tib] stong pa nyid dang chad med dang// 'khor ba dang ni rtag pa min// las rnams chud mi za ba'i chos// sangs rgyas kyis ni bstan pa yin// (PSP D 106b5-6; P 122a7-8)

[大 A5] 雖空亦不斷 相續亦不常 罪福亦不失 如是法佛説 (T 64c9-10)

[大 A12] 佛法相雖空 亦復不斷滅 雖生亦非常 諸行業不失 (T 117c29-118a1)

[中] 雖空亦不斷 雖有亦不常 業果報不失 是名佛所説 (T 22c21-22)

この偈頌は、業とその果報の結合関係を論じており、両者は空ではあるが断

滅することはなく、輪廻する中で関係は続くが、常住ではないという。また、そのような業を不失 (avipraṇāśa) の法であると規定し、それはまた仏説に他ならないと付言している。

ルイギェルツェンによる『無畏論』『仏護注』『般若灯論』のチベット語訳についていえば、いずれも pāda a 内の ucchedaḥ の訳が chad med でなく chad min とあることを除いて、上記のニマタクによる『プラサンナパダー』の訳文に等しい⁽²¹⁾。

いま、この偈頌が興味深いのは、後述のような一部に推測されるテキスト上の相違ではなく、当該の偈頌が論者の説か、あるいはまた敵者のそれを表明するのかという偈頌の位置づけに関する相違点である。他の諸注釈とは異なり、青目作『中論』と『大智度論』は、これをいずれも論者の説を表明する偈頌として位置づけている。

青目作『中論』は、

「問曰。若爾者。則無業果報。答曰

雖空亦不斷 雖有亦不常 業果報不失 是名佛所説」(T 22c19-21)

(問うて曰く。若し爾らば、則ち業と果報と無からん。答えて曰く。

空なりと雖も断ならず。有なりと雖も亦常ならず。業と果報の不失、是は仏の所説と名づく。)

と出るように、この偈頌を、論者による回答と位置づけている⁽²²⁾。先の『プラサンナパダー』所引のサンスクリット文に照らして、pāda b (第二句) 内の saṃsāra = 「有」の訳例がやや特異ではあるが⁽²³⁾、これは第一句内の「空」との対で選び取られたと見るべきで、原文の相違を推測するには及ばないであろう。第三句内の「果報」も補足語として理解されよう。

本偈を論者の説と解釈するのは、『大智度論』もまた同様である。初めの例 (A5) は、卷一・初品第二「如是我聞一時」釈論中の「聞」の解説内に引用される。

「聞者今當說。問曰。聞者云何。……。答曰。非耳根能聞聲。亦非耳識亦非意識。……。雖*聞聲。佛法中亦無有一法能作能見能知。如偈說。

有業亦有果 無作業果者 此第一甚深 是法佛能見

雖空亦不斷 相續亦不常 罪福亦不失 如是法佛說」(T 64b19-c10. * T:「誰」; 宋元明三本:「雖」; 宮内庁本, 石山寺本:「誰(雖)聞聲」
欠)

(聞くとは今当に説くべし。問うて曰く。聞くとは云何。……。答えて曰く。耳根は能く声を聞くに非ず。亦耳識にも非ず、亦意識にも非ず。……。声を聞くと雖も、仏法の中には亦一法として能作、能見、能知有ること無し。偈に説くが如し。

業有り亦果有るも、業と果を作す者無し。此れ第一の甚深なり、是の法は仏能く見たもう。

空なりと雖も亦断ならず。相続すれども亦常ならず。罪福も亦失せず。是の如き法は仏説なり。)

すなわち、聞くという行為(業)とその果報はあってもその主体は存在しないという文脈での引用であり、当該偈は二つの引用偈の中の第二のものである。なお、第二句内の「相續」の対応原語は、saṃsāra でなく saṃtāna であった可能性が強い。また第三句内の「罪福」は、karman の意識と見るべきであろう。

次に、同論の第二の引用(A12)は、卷八・初品第十四之餘「放光」釈論に引かれるもので、

「問曰。五陰*無常空無我。云何生天人中。誰死誰生者。答曰。……。世界法中實有生死。實相法中無有生死。復次生死人有生死。不生死人無生死。何以故。不生死人以大智慧能破生相。如說偈言。

佛生相雖空 亦復不斷滅 雖生亦非常 諸行業不失」(T 117c18-118a1. *T:「衆」; 宋元明三本, 宮内庁本, 石山寺本:「陰」)

（問うて曰く。五陰は無常・空・無我なり。云何にして天人の中に生まれ、誰か死に、誰か生ずる者あらん。答えて曰く。……。世界法の中には実に生死有れども、実相法の中には生死有ること無し。復た次に、生死の人には生死有るも、不生死の人には生死無し。何を以ての故に。不生死の人は大智慧を以て能く生の相を破すればなり。偈を説いて言うが如し。

仏法の相は空なりと雖も、亦復た断滅せず。生ずと雖も亦常に非ず。諸の行業は失せず。）

と出る。実相においては生死はない、という文脈での引用である。第一句内の「佛法相」は、*dharmo buddhena deśitaḥ*の意識と見られ、また訳文の構成を変えてはいるが、原文レベルの相違を推測するには及ばないであろう。

これに対して、『無畏論』『仏護注』『般若灯論』『プラサンナパダー』、これに加えて安慧の『大乘中観釈論』もまたこの偈頌を、論者の説ではなく敵者の主張を表すものと位置づけるのである。総数三十三の偈頌により構成される「行為（業）と果報の考察 *Karma-phala-parikṣā*」あるいは「観業 [品]」と呼ばれる同章の中で⁽²⁴⁾、敵者の具体的な学派の比定はともあれ、論者、敵者のいずれの説かという偈頌の位置づけに関して注釈間で異なるのは、後にふれる第十二偈と、ここで検討する第二十偈のみである。

同章は、大別して行為と果報の結合関係に関する三つの学説を紹介する。詳細は別稿を期したいが、古蔵の『中観論疏』、漢訳『般若灯論』、およびアヴァローキタヴラタによる『般若灯論注』*Prajñāpradīpaṭīkā*等の関連文献を基に論証した従来の研究は⁽²⁵⁾、これらの三つの学説を、それぞれ①毘婆沙師（＝説一切有部）（第一偈～第五偈）、②経量部（第七偈～十一偈）、③正量部（第十三偈～第二十偈）のそれに比定する⁽²⁶⁾。そこでは、業と果報の結合関係に関するこれら三つの主要な学説が、それぞれ思業・思已業ならびに表・無表二業の七法、心相続 (*cittasamṭāna*)、業の不失 (*avipraṇāśa*) 法として紹介される。

なお、第六偈を論者による学説①に対する批判とみる解釈は、いずれの注釈にも共通する。しかし、第十二偈については、青目注および安慧釈のみは論者の立場から学説②を批判すると解釈するのに対して、他の注釈はいずれも学説③の立場から学説②を批判するものと位置づけている。

さて、先にふれたように、問題の第二十偈については、『大智度論』および青目作『中論』の両者を除くすべての注釈が第十三偈から連続する敵者の弁の一部と位置づける。したがって、第二十一偈以降が論者による反駁ということになる。

これに対して、『大智度論』および青目作『中論』のいずれも、第二十偈を論者の立場を表明する偈頌として位置づける。両論がこのような位置づけを行った背景には、同偈の pāda *a* 冒頭に śūnyatā「空性」の術語があり、また行為(業)の不失 (avipraṇāśa) の法が buddhena deśitaḥ//「佛所説」であると説かれていることも何らかと与ったであろうか。ここでは、適否の問題は別として⁽²⁷⁾、両論による当該偈の位置づけが、揃って他の注釈と異なる点が注目される。このことは、『大智度論』と青目作『中論』の伝承の古さを物語るとともに、伝承そのものの地理的な隔たりを窺わせると言えるかも知れない。

むすび

以上のように、『大智度論』所引の『中論』頌をめぐって、いくつかの考察を行った。もっとも、かなり重要な偈頌が多いとはいえ、『大智度論』が引用する偈頌の中で、『中論』頌の引用がごく一部にとどまっているのは事実である。したがって、以上の限られた考察から、『大智度論』全体の文献上の性格を描きとるのは、かなり困難であることは認めざるをえない。この点の解明は、今後の関連研究の着実な進展に期待するほかない。ここでは最後に、以上の考察から窺い知ることができた同論の特色のいくつかを指摘して、本稿を結ぶこ

としたい。

- ①『大智度論』には、『中論』頌の直接的な引用であることが判明している偈頌は、少なくとも十四偈あり、総計で十八回の引用例を見る。
- ②これらの偈頌は、その原本が写本の形であれ暗誦された形であるにせよ、基本的に翻訳文であると考えられる。
- ③ただし、同論所引の『中論』頌の翻訳文には四言四句から七言四句までの幅があり、同じ羅什訳で、五言四句で訳文を統一する青目作『中論』や『十二門論』の所引偈とは異なって、翻訳形式に一貫性がない。また、不統一は翻訳文そのものにも見られ、同一偈が二回にわたって引用される四例は、いずれも訳文が相違する。
- ④このことは、同論所引の『中論』頌が翻訳文であって、しかも訳文の完成には複数の人間が関与したと推定させるに十分であろう⁽²⁸⁾。同論は羅什自身や僧肇や僧叡等の弟子による最終的な訳文の整理ないし統一をまたずに完成されたと考えられる。
- ⑤MK 23.13 の例に見るように、同論所引の『中論』頌は、青目作『中論』所引の偈頌ともテキストおよび解釈が異なることがある。この点は、上の③④のポイントとともに、青目とは異なる作者による『大智度論』の依拠テキストの伝承が四世紀半ばの西域にあったことを裏づけるであろう。
- ⑥また MK 17.20 が例示するように、偈頌の論者・敵者の位置づけに関しては、『大智度論』は青目作『中論』とともに、他の諸注釈とは異なる理解のもとに引用することがある。この点は、『中論』頌をめぐる両論の伝承上の古さとともに、両論の伝承に関する他の諸注釈との地理的な隔たりをも窺わせると言えるかも知れない。

(本稿で使用するアステリスク(*)は、簡単な注記に用いる他は、サンスクリット語の左肩に付して、当該の語が対応するチベット語あるいは漢訳、ならびにその文

脈から推定された語であることを意味する。)

- 1 『出三藏記集』卷二 (T vol. 25, 11a25)。なお、『開元釈教録』卷四 (T vol. 55, 511c18) は羅什の訳経論を七十四部・三百八十四巻とする。羅什の生涯ならびに訳経に関しては、塚本 (1954), 横超・諏訪 (1983) を参照。
- 2 『中論』『十二門論』の翻訳年代については、それぞれ『出三藏記集』に収められる曇影と僧叡の序の末尾において、「羅什法師以秦弘始十一年於大寺出 [之]*」 (T vol. 55, 77b8-9, 78a4-5. *『百論』序 (77b9) には「之」欠) というほぼ同一内容の割注として言及されるにすぎない。また、『出三藏記集』の「名録」の該当箇所 (卷二) には何らの注記もないことから、これらの割注を後代の付加とみる説もある。塚本 (1954) p. 144, 横超・諏訪 (1982) p. 244 参照。
- 3 『十二門論』所引の『中論』頌に関しては、宇井 (1925) 「三論解題」内 pp. 203-205, Robinson (1967) pp. 32-33 等参照。
- 4 T vol. 25, 756c9-18; 『出三藏記集』T vol. 55, 75b9-18 (大智論記第二十)。中嶋 (1997) p. 296 参照。
- 5 『大智度論』の著者問題については、加藤 (1996) が、平川 (1957), 干潟 (1958), Lamotte (1970), 印順 (1993) 等による従来諸説を詳しく紹介する。その上で氏は、同論の記述の特色に加え、羅什訳とされる『成実論』の影響、ならびに従来看過されてきた『百論』の具体的な引用例を挙げ、原本をふくむ羅什著作説を提起する。その後、武田 (2000) は、『大智度論』における般舟三昧=「不退転」の菩薩の方便という思想が、竜樹に帰せられる『菩提資糧論』にあり、羅什説を引く『大乘大義章』や『註維摩』に見られないことを論拠として、改めて竜樹著作・羅什加筆説を支持している。
- 6 三枝 (1966) は、詳細な検討の結果、「十九回三十四偈 (重複するものを除いて中論からみれば三十偈) が数えられる」と結論している。
- 7 T vol. 25, 756c14-17; vol. 55, 75b15-17. Cf. 中嶋 (1997) p. 296.
- 8 T vol. 30, 36b18-19: 「問曰。汝以摩訶衍説第一義道。我今欲聞説聲聞法入第一義道。」
- 9 T vol. 50, 330b28-c24.
- 10 De Jong (1977) p. 18.5, *do.* (1978) p. 55.37 により訂正。Cf. LVP: iti.
- 11 De Jong (1977) p. 25.1, *do.* (1978) p. 227.38-p. 228.2 により訂正。Cf. LVP: nivṛte cittagocare.
- 12 Tib. によれば、「涅槃の究極であるもの、それは涅槃の究極である」。その依拠テキストの pāda b 末は ca でなく sã を推測させる。

- 13 三枝 (1966) pp. 87-89 は、『大智度論』に引用されるすべての偈頌の翻訳形式の一覧を挙げる。
- 14 なお、『中論』第二十三章の中で、この第十三偈は次の第十四偈と対になるもので、『無畏論』等と『プラサンナパダー』とにおける偈頌テキストと解釈上の相違は両偈に及んでいる。『無畏論』等は、空においては恒常も無常もないのであるから、恒常であると捉えることばかりでなく、無常であると捉えることもまた顛倒に他ならない、という。これに対して、後者の『プラサンナパダー』は、空においてはそもそも無常であることもないのであるから、無常であるものを恒常と捉えることと規定された顛倒はあり得ず、また、無常であると捉えることが非顛倒であるということも正しくない、という。両者ともに、空においては、無常なものを恒常であると捉えることが顛倒であると規定された顛倒そのものがあり得ないと結論する。参考までに、『プラサンナパダー』所引の第十四偈のサンスクリット文、和訳、チベット語訳、ならびに『無畏論』等に引用される同偈のチベット語訳、和訳、推定サンスクリット文は以下のとおりである。

[PSP] MK 23.14:

anīte nityam ity evaṃ yadi grāho viparyayaḥ/
anīyam ity api grāhaḥ śūnye kiṃ na viparyayaḥ// (PSP p. 462.8-9)

「もしも「無常であるものを恒常である」とこのように捉えることが顛倒であるなら、空であるものに対して「無常である」と捉えることも、どうして顛倒でないであろうか。」

gal te mi rtag rtag (P: om.) go zhes// de ltar 'dzin pa log yin na//
stong la mi rtag pa'o zhes// 'dzin pa'ang ji ltar log ma yin// (PSP D
151b7-152a1; P 172b2-3)

[ABh] [BP] [PP] MK 23.14:

gal te mi rtag mi rtag ces// de ltar 'dzin pa log min na//
stong la mi rtag yod min pas// 'dzin pa ji ltar log ma yin//

「もしも「無常であるものを無常である」とこのように捉えることが顛倒でないなら、空であるものには無常であることが [そもそも] ない [のであるから]、[無常であるものを無常であると] 捉えることが、どうして顛倒でないであろうか。」

(= *anīte 'nityam ity evaṃ yadi grāho 'viparyayaḥ/
nānīyaṃ vidyate śūnye kuto grāho 'viparyayaḥ//)

- 15 Klu'i rgyal mtshan による ABh, BP, PP, PPT の訳出手順、およびこれらの注釈に引用された MK 部分のチベット語訳の問題については、斎藤 (1987a)、同

(1987b), Saito (1995) 参照。

- 16 以下、『大智度論』釈部の理解に関しては、とくに異同を注記しないが、真野 (1935), Lamotte (1944), 中祖・諏訪・大野・吉田 (1985) (1988), 梶山・赤松 (1989) を、青目作『中論』の釈部については、Walleser (1912), 宇井 (1921), 羽溪 (1930) を、また吉藏作『中觀論疏』に関しては、宮本・梶芳・泰本 (1968) を参照。
- 17 卍統藏經 26-1, 68 左下 ll. 8-9.
- 18 Cf. 三枝 (1966) pp. 90-91.
- 19 T vol. 30, 31c15-16: 若於無常中 著無常非倒 空中無無常 何有非顛倒。これは、内容的に、注 (14) に挙げた『無畏論』等の引用偈に等しい。
- 20 Cf. 三枝 (1966) p. 92.
- 21 ABh D Tsa 66b7-67a1, P Tsa 78a5-6; BP D Tsa 235b1-2, P Tsa 266b2-3; PP D Tsha 175a4, P Tsha 217b5-6)
- 22 吉藏は、『中觀論疏』の中で、この偈頌の後半には二つの意味があるとして以下のように注釈する。

「業果報不失者下半二意。一者明業具二諦故不斷常。令果報不失。無有別不失法持業令不失。蓋是如來依二諦說法。故云此是佛所說。二者若依下長行釋。上半正明業是二諦故不斷常。此是申中道正義。卽是對偏之中。下半破邪義。汝不知二諦中道。言有不失法謂是佛所說耳。」(T vol. 42, 122a7-13)

（「業果報不失」というのは、[偈頌の] 下半に二意あり。一には、業は二諦を具するが故に断常にあらずと明かして、果報をして失せざらしむ。別の不失法有りて業を持して失せざらしむること無し。蓋し是れ如來は二諦に依って法を説く。故に「此れは是れ仏の所説なり」と云う。二には、若し下の長行に依って釈せば、[偈頌の] 上半は正しく業是れ二諦なるが故に断常にあらずと明かす。此れは是れ中道の正義をの申ぶ。即ち、是れ對偏の中なり。下半は邪義を破す。汝は二諦中道を知らずして不失法有りと言いて、是れ仏の所説なりと謂うのみ。)

この理解によれば、偈頌の後半部の「業果報不失 是名佛所說」は二つの解釈が可能であるという。すなわち、第一のそれは、偈頌からの直接的な解釈で、業と果報は失われないというのは仏説である、という論者の立場を表明する偈頌であるとの解釈である。これに対して、第二の解釈は、青目による長行、つまり散文による注釈部分に「復次貪著顛倒不知實相故。言葉不失。此是佛所說。(復た次に、顛倒に貪著して実相を知らざるが故に、業の不失、此れは是れ仏の所説なりと言う。)」とあることに基づく解釈である。この第二の解釈が青目の解釈であるとすれば、青

- 目は、偈頌の後半部を、論敵の説に否定的に言及するものと見なしていることになる。いずれにせよ、第二十偈全体を論者の弁と位置づけることには変わりはない。
- 23 青目作『中論』所引偈では、saṃsāra の訳例として「生死」が五例 (MK 11.1, 11.8, 16.10, 26.10, 27.19), 「世間」が二例 (25.19, 25.20) あるが、「有」の訳例は本偈のみ。
- 24 ABh, BP, PP (=las dang 'bras bu brtag pa) ならびに PSP が前者の章名を、これに対して青目注、漢訳『般若灯論』(唐・波羅頗迦羅蜜多羅訳, 630年), および安慧作『大乘中觀釋論』(宋・惟浄等訳) は後者の「観業 [品]」を採る。
- 25 Lamotte (1935-36), 山口 (1951) pp.153-155, 舟橋 (1954) pp.38-208 (esp.118-9), 梶山 (1979) 等。
- 26 青目注は「問曰」「答曰」として敵者と論者を区別するのみで学派名を示さない。ABh, BP, PP の三者も同様で、単に, “[dir] smras pa” (= * [atra] āha) と “bshad pa” (= *ucyate) で両者を区別する。ただし、第十二偈の導入部については、ABh (D Tsa 653), BP (D Tsa 233b2), PP (D Tsha 173b4) の三者はいずれも共通して “gzhan dag gis smras pa” (= *apara āhuḥ) と置き、③の敵者がそれ以前とは異なることを示す。これに対して、PP 漢訳は①②を阿毘曇人、③を正量部と明言する。また PPT は、①と③を Bye brag tu smra ba dag (Vaibhāśikāḥ 毘婆沙師達), ②を sde pa gzhan dag (= *nikāyāntariyāḥ 他部師達) と注釈し、安慧釋は、①②③のいずれをも阿毗曇人の説と語る。さらにまた PSP は、①の導入は atrāha (p.302.3), ②は tatraike nikāyāntariyāḥ (p.312.1), ③apare (p.315.12) とし、三つの学説が異なる部派のものであることを示唆するものの、学派名は明示しない。
- 27 この偈頌が、はたして全体として正量部説を語るのか、あるいは青目作『中論』の長行に見られるように、前半が論者の、そして後半が敵者の主張を批判的に紹介していると見るべきであるのか、あるいはまた二箇所『大智度論』の引用例に見られるように、全体として論者の説を表明すると考えるべきであるのかは判然としない。ただし、少なくとも後半偈は、第十三偈からの延長線上にあり、不失法は仏説に他ならないと語る敵者 (正量部) の説に相当すると解釈するのは文脈に一致するように思われる。この偈頌をめぐる問題については、機会を得て再論したい。
- 28 Seyfort Ruegg (1981) pp.32-33 もまた、『大智度論』の著者に関して、同論には多数の著者による作品あるいは共同の著作 (multiple or collective authorship) であることを示唆する点が多々あると見る。少なくとも現行の「訳本」については、ここでの考察もまた『大智度論』合作説を裏づけている。ただし、

それが『大智度論』の依拠した原本レベルにまで遡及するかどうか、この点は今後の興味深い検討課題の一つであろう。

[略号]

- ABh: *Mūlamadhyamakavṛtṭy-akutobhayā*, Klu'i rgyal mtshan et al. tr., P No. 5229, D No. 3829.
- BP: *Buddhapālita-mūlamadhyamakavṛtṭi*, Klu'i rgyal mtshan et al. tr., P No. 5242, D No. 3842.
- D: Tibetan tripiṭaka, sDe dge edition.
- LVP: La Valleé Poussin, L. de
- MK: *Mūlamadhyamakakārikā*. See PSP.
- P: Tibetan tripiṭaka, Peking edition.
- PP: *Prajñāpradīpa-mūlamadhyamakavṛtṭi*, Klu'i rgyal mtshan et al. tr., P No. 5253, D No. 3853.
- PPT: *Prajñāpradīpaṭīkā*, Klu'i rgyal mtshan et al. tr., P No. 5259, D No. 3859.
- PP 漢訳: 『般若灯論釈』唐・波羅頗迦羅蜜多羅訳, T vol. 30, No. 1566.
- PSP: *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IV, St.-Petersbourg, 1903-1913.
- PSP Tib: *Mūlamadhyamakavṛtṭi-prasannapadā*, Nyi ma grags et al. tr., P No. 5260, D No. 3860.
- T: 大正新脩大藏經
- 安慧訳: 『大乘中觀論』宋・惟浄等訳, T vol. 30, No. 1567, 卍統藏經 26-1.
- 大: 『大智度論』後秦・鳩摩羅什訳, T vol. 25, No. 1509.
- 中: 『中論』姚秦・鳩摩羅什訳, T vol. 30, No. 1564.

[参考文献]

- De Jong, J. W. (1977) : *Nāgārjuna Mūlamadhyamakakārikāḥ*, The Adyar Library Series, vol. 109, Adyar.
- do. (1978) : "Tectcritical Notes on the Prasannapadā", *Indo-Iranian Journal*, vol. 20, pp. 25-59, 217-252.
- Lamotte, É. (1935-36) : "Madhyamakavṛtṭi. XVII^e Chapitre: Examen de l'acte

- et du fruit”, *Mélanges chinois et bouddhiques*, vol. 4, pp. 265–288.
- do. (1944–1980) : *Le traité de la grande vertu de sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāsāstra)*, Tome I, 1944; II, 1949; III, 1970; IV, 1976; V, 1980, Louvain.
- Robinson, R. H. (1967) : *Early Mādhyamika in India and China*, Madison (repr. Delhi, 1976).
- Saito, A. (1995) : “Problems in Translating the *Mūlamadhyamakakārikā* as Cited in its Commentaries”, *Buddhist Translations: Problems and Perspectives*, Delhi, pp. 87–96.
- Seyfort Ruegg, D. (1981) : *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India*, A History of Indian Literature, vol. VII–1, Wiesbaden.
- Walleser, M. (1912) : *Die Mittlere Lehre des Nāgārjuna. Nach der chinesischen Version übertragen*, Heidelberg.
- 印順 (1993) : 『『大智度論』の作者とその翻訳』(岩城英規訳) 正観出版社, 山喜房仏書林。
- 宇井伯寿 (1921) : 「国訳中論」『国訳大藏經』論部 5, 国民文庫刊行会 (『宇井伯寿著作集』4, 大東出版社, 1968 に再録), pp. 215–475.
- 横超慧日・諏訪義純 (1982) : 『羅什』(人物中国の仏教) 大藏出版。
- 梶山雄一 (1979) : 「パーヴァヴィヴェカの業思想——『般若灯論』第一七章の和訳——」『業思想研究』(雲井昭善編) 平楽寺書店, pp. 305–357.
- 梶山雄一・赤松明彦 (1989) : 『大智度論』(大乘仏典 中国・日本編 1) 中央公論社。
- 加藤純章 (1996) : 「羅什と『大智度論』」『印度哲学仏教学』11, pp. 32–58.
- 三枝充恵 (1966) : 「大智度論所収偈頌と中論頌」『印度学仏教学研究』15–1, pp. 85–97 (『増補新版 龍樹・親鸞ノート』法蔵館, 1997, pp. 301–325 に一部補訂のうえ再録)。
- 斎藤 明 (1987a) : 『『根本中論』テキスト考』『仏教研究の諸問題』(平川彰編) 山喜房仏書林, pp. 221–246.
- 同 (1987b) : 『『根本中論』チベット訳批判』『高崎直道博士還暦記念論集・インド学仏教学論集』(前田専学編) 春秋社, pp. 755–764.
- 武田浩学 (2000) : 「『大智度論』の著者はやはり龍樹ではなかったのか」『国際仏教学大学院大学研究紀要』3, pp. 211–244.
- 塚本善隆 (1954) : 「佛教史上における肇論の意義」『肇論研究』(同編) 法蔵館, pp.

113-166.

- 中嶋隆藏 (1997) : 『出三藏記集・序卷訳注』(同編) 平楽寺書店。
- 中祖一誠・諏訪義純・大野栄人・吉田道興 (1985) : 「大智度論和訳 (一)」『禅研究
所紀要』(愛知学院大学禅研究所) 14, pp. 141-302.
- 同 (1988) : 「大智度論和訳 (二)」『禅研究所紀要』16, pp77-186.
- 羽溪了諦 (1930) : 「中論」『国訳一切経』中観部 1, 大東出版社, pp.57-248.
- 干潟龍祥 (1958) : 「大智度論の作者について」『印度学仏教学研究』7-1, pp. 1-12.
- 平川 彰 (1957) : 「十住毘婆沙論の著者について」『印度学仏教学研究』5-2, pp.
504-509.
- 舟橋一哉 (1954) : 『業の研究』法蔵館。
- 貞野正順 (1935-36) : 『大智度論』(『国訳一切経』釈経論部 1-5 下) 大東出版社。
- 宮本正尊・梶芳光運・泰本融 (1968) : 「中観論疏下」『国訳一切経』(和漢撰述 27)
論疏部 7, 大東出版社。
- 山口益 (1951) : 『世親の成業論』法蔵館。

(平成 11-13 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 (B) (2) 「大智度論の総
合的研究——その成立から中国仏教への影響まで」の研究成果の一部)